

1920年代広州の婢女解放と風俗改革

蒲 豊 彦

はじめに

国民革命期の広州、なかでも北伐開始前後の広州はとくべつな熱気につつまれていた。

1925年9月に広州にやってきたある国民党工作員は、「この数年、十余の省を流れてきたが、広州のようなところはなかった。……広州のみが自由な土地で、自由、光明を求める青年はこの革命の新都市を聖地としていた」という⁽¹⁾。

満鉄調査員として1926年3月ごろに広州を訪れた伊藤武雄は、「四年目に見る広東の風景は、予想以上に活気にあふれていて、市街整理は進み、街中のいたるところに各種政府機関や組合の看板がかかげられ、その屋上には青天白日旗がひるがえり、壁には運動標語が書かれ、こうしたものがいやというほど目に飛びこんできたという。伊藤の印象では、「国民党政治の最も栄光ある華やかな時期」であり、さらに「言論と出版の自由が極度に自由であり、書店には、当時の日本で入手出来ない反帝社会主義文献の翻訳などが、なんでも手に入った」⁽²⁾。

そしてやがて北伐がはじまると、北伐軍の主体であった黄埔軍官学校の学生が注目をあび、「当時の中山服は若い女性の憧憬の的となった」⁽³⁾。

こうしたなか、革命を志す人たちの視線は、一方で社会のより底辺にもむけられた。1924年には人力車夫の組合が結成されている。そして、運動の深まりをさらによく示すものとして、旧中国社会のいわば賤民階級だった奴婢を解放しよう、という動きがあった。ただし、この解放への動きは、「革命」との関連のみで考えることはできない。本稿では、奴婢のなかでもとくに婢女に限定して、その解放問題を整理してみたい。

広州に隣接する香港の婢女（妹仔という）については、すでに可児弘明が詳細な研究をおこなっている⁽⁴⁾。そもそも妹仔とは、「身価の授受を行って生家から買主へ、あるいは原買主から転買主へと人身支配権を移転され、買主に無償で私役された女婢」のことである⁽⁵⁾。可児氏は香港の保良局の資料をつかって、妹仔の売却文書の特徴、こうした社会慣行をささえていた論理、買主による虐待の実態、買主として娼妓や、盲目の歌手である瞽姫、妾、自梳女、さらに海外への転売があったこと、等々を明らかにしたうえで、最後に香港での妹仔解放の経緯に触れている。

それによれば、香港で妹仔制度が政治問題化するのは、1879年に首席判事のジョン・スメイルが妹仔制度は奴隷制度にはかならない、と断定したことによるという。

そののち、1919年末から1920年初頭にかけて、香港とイギリスの両地域でこの制度にたいするはげしい批判がおこり、イギリス議会が問題としてとりあげ、また香港では妹仔制に反対する

協会が結成された。

そして1923年2月には香港政庁が妹仔条例を制定し、10歳以下の子どもをあらたに妹仔にすることを禁止し、またすでに存在している妹仔についても、買主に数々の規制をもうけた。しかし、妹仔制度自体を廃止することはず、また条例がきびしく施行されることもなかった。

これにたいして、1927年に妹仔反対運動がふたたび活発化し、1929年9月にいたって香港総督は、同年12月1日を期して妹仔を非合法身分とすることを布告し、香港の妹仔問題は、これをもっていちおう決着したという。

1923年の妹仔条例がじゅうぶんに機能しなかった理由のひとつとして、香港政庁は、中国本土で妹仔制度が存続していることをあげた⁽⁶⁾。妹仔制度は中国にひろく存在するが、香港の妹仔のおおくは広州から転売されてきており⁽⁷⁾、いわば供給源が温存されたままでは香港としてもどうしようもない、ということである。

つまり妹仔をめぐる広東の状況が非常に重要になってくるが、これについて可見氏はマジャーラの『支那農業経済論』を引用して、1926年（1927年？）に広東省が「女奴隷」を解放する布告を出したが、その結果は奴隷を「養女」と改称したにすぎなかった、と指摘するにとどまる。

本稿では、おもに『広州民国日報』を資料として使いながら、以下、第1章で、新聞記事のなかに広州の婢女がどのように現れてくるかを、第2章では、広東省で婢女解放関係の法律がどのように制定されていくのかをまとめ、第3章ではさらに、そうした法律が制定された社会的背景を考えてみる。

1. 新聞記事のなかの婢女

広州の婢女については、香港の保良局文書のようなまとまったものは存在しないようだが、1923年から1929年分までが影印出版されている『広州民国日報』には関係記事が散見し、1920年代の婢女の状況に関して貴重な情報を提供している。

筆者がこれまでに収集した関係記事のうち、婢女の年齢の判明しているものが、52人分ある。最年少はわずか3歳のとき婢女に売られ、つぎが6歳、7歳とつづき、最年長は21歳である。3歳の婢女は満年齢では2歳ほどになり、とても仕事ができとは思えない。将来にそなえて早めを買っておいた可能性が考えられるが、しかしその間、食費や養育費なども必要となり、3歳の婢女とはいったいどのような存在なのか、よくは分からない。また、10歳以下の婢女はわずか5人しか確認できない。そこで、10歳以下を除いて計算すると、婢女の平均年齢は16.6歳になる。

その出身地をみると、仏山、香山、番禺、新会、南海、鶴山など、広州に近い県がほとんどを占め、広州市内出身者が2名、また他省出身者としては、湖南と広西からそれぞれ各1名が来ているのみである。

つまり、新聞記事からうかがえる婢女とは、おおむね、広州周辺の近県から買われてきた16歳前後の少女、ということになる。そして、これがおそらく当時の婢女の平均的な姿だったのではないと思われる。

a. 失踪と誘拐

これらの少女は、どのような形で新聞に登場してくるのか。もっともおおいのが、行方不明になったというニュースである。一例をあげてみよう。

七区三分署、蘆排新街四号の婢女、杜秋容、十九歳、南海人が、十一月二日、買物に出たまま失踪⁽⁸⁾。

分署とは警察分署のこと。また婢女にかぎらず、人妻、妾、普通の少女、男子児童なども当時頻繁に失踪し、こうした簡潔なニュースは、「尋ね人」の意味合いもあったと思われる。

行方不明の内容をさらに見てみると、おさない婢女がたんに迷子になっただけの場合や、また主人のものを持ち逃げしている事件もいくつかあるが、婢女という存在を考えるうえで注目すべき現象として、失踪に第三者が関わっている場合がしばしば見られる。

まずその単純な例として、ある家塾での事件をとりあげてみよう。惠愛路の鄭氏の家塾では、部屋をいろいろな人に貸し出していたが、そのなかの李家でよく物が紛失した。連絡を受けた区署は、警察官を夜間巡回させることにした。ところがそのうち、警察官のひとりが鄭家の婢女と顔なじみになり、彼女をさそって一緒に失踪してしまう。そして、仏山まで逃げたところで捕まった⁽⁹⁾。

これはおそらく、親しくなった巡査と一緒に駆け落ちをしたもので、記事の内容から判断するかがり、それ以上の意味はなさそうである。だが、つぎの場合になると、疑問が残る。

雲南軍総司令部秘書の黄宝麟は、17歳の婢女とともに夫婦で広州市内のある旅館に逗留していたが、ある日、外出から戻ってみると、「ほかの所へ行って雇ってもらいます」という置き手紙を残して、婢女が消えていた。黄宝麟の現金や指輪もなくなっていた。手紙はだれかに頼んで書いてもらったものらしい。思い返せば、となりの部屋に宿泊していた男女二人も、正業についているような感じではなく、前日その部屋で婢女が話しをしているのを黄宝麟が注意したばかりだった。そして婢女と同時に、その二人も消えてしまった⁽¹⁰⁾。

この事件では、となりの男女二人の素性が気にかかる。婢女にかぎらず、このような場合は一般に、仕事を探してやることを口実に女性をつれだし、売り飛ばしてしまう可能性を考えなくてはならない。中国での、誘拐のありふれた手口のひとつである。これは、婢女が自分の境遇から逃げ出そうとしても、そのあとに何が待ち受けているかを示しているといえよう。

誘拐については次節でもう一度検討することとして、失踪にかかわる「第三者」をもうすこし見ておくと、つぎのような事件がある。

①18歳のある婢女が夜の6時ごろ逃げ出した。じつは午前9時ごろに、婢女の祖母が尋ねてきて二人で台所で話しこんでいたが、その夜に逃げ出したのだった⁽¹¹⁾。

②主人に可愛がられていた17歳の婢女が、主人の貴金属類を持出して逃げた。主人は婢女の母親が娘をそそのかして持ち逃げさせたのではないかと疑った⁽¹²⁾。

これらの失踪に、もしほんとうに家族がかかわっていたとすると、たんに逃げさえすれば、売主である家族は娘の売り渡し代金（身価という）をまるまる儲けたことになる。二番目の例では、

それに貴金属が付け加わる。

最初から詐欺目的でことを行うこともある。ある男が人の紹介で10歳の婢女を買い、その日のうちに身価136元の支払いを済ませたが、翌日、その婢女が逃げてしまった⁽¹³⁾。同じようなことは、金を払って妻や妾を買う場合にもおこり、これを「放白鴿」という。鴿（鳩）がもとの家に戻ることにかけているのだろう。

なお、ここでは身価が136元となっているが、新聞記事にはほかに、160元(1923年)⁽¹⁴⁾、百余元(1925年)⁽¹⁵⁾、115元(1925年)⁽¹⁶⁾といった数字が見えている。

いずれにしてもこれらの事件は、婢女が金銭によって売買されることと、ふかい関係を持っている。

b. 虐待

失踪のつぎに新聞によく現れるのは、主人による虐待である。これはまた、誰かに誘い出されること以上に、婢女が主人の家から逃げ出すおきな要因になっている。たとえば次のような記事がある。

昨日午後一時、五区二分署の警察官が、万福東路から、挙動不審の女兒一名を連れ帰った。

名前を杏桃といい、婢女だったが、主人の虐待に耐えられず逃げ出したのだという⁽¹⁷⁾。

主家を逃げ出して警察に駆け込む場合もあった。17歳になるある婢女は、馮某のところを買われてすでに十余年になるが、「馮夫婦はともに、性格が異常に残酷で、すこしでも気に入らないことがあると、虫の息になるまで鞭で打ちのめした」。婢女はついに、機を見て逃げ出し、第二区分署に駆け込んだ⁽¹⁸⁾。

また、家出を繰り返すこともある。婢女の福勝はかつて楊家で可愛がられていたが、楊家はやがて家産が傾き、そのため福勝を某家に転売した。一年ほど前のことである。ところがその家の主婦は「きわめて凶暴で、いつもささいなことから婢女を殴りつけ、体じゅう傷だらけにしていた」。福勝は耐え切れず、ついにもとの楊家に逃げたが、戻される。某家の主婦はますます腹をたて、前日の夕刻、福勝がたまたま主婦の娘の意に逆らったところ、二人してひとしきり殴りつけた。福勝はそこで今度は、楊家の親戚に逃げ込んだ。扱いに困った親戚は、福勝を警察署に届けた。警察では、婢女を受け取りにくるよう某家に連絡したが、「罪を恐れて」受け取りにやってくない。そこで福勝は済良所に送られて結婚相手を見つけてもらうことになった⁽¹⁹⁾。済良所は公安局に付設された保護施設で、迷子や誘拐された人、また行き場のない婢女や妓女を収容した⁽²⁰⁾。

この例について、説明を二点加えておきたい。まず一点は、もとの主人の楊家が婢女を可愛がっていたと記され、そして実際、福勝が楊家に逃げ帰っていることである。婢女はおさなくして転売を繰り返されるうちに、両親の居場所が分からなくなってしまうこともある。そうしたとき、頼るものとしてはもとの主人しかない、という状況も考えられるが、しかし、さきに紹介した、貴金属を持ち逃げした17歳の婢女の場合も、主人に可愛がられていたとされている。

香港で妹仔制度が問題となったとき、華人社会から制度廃止に反対するつよい意見が出され、

その理由の一つが、「妹仔は家族の一員」と見なされており虐待されているわけではない、というものだった⁽²¹⁾。また香港政庁も、「妹仔は全体として、自分の生家よりもずっと程度の良い快適さと暮らしに満足している」と考えていた⁽²²⁾。これらの見解を鵜呑みにするわけにはいかないが、一方でこうした見解を支えるような事例はたしかに存在し、これらの新聞記事はそうした事実をある程度反映しているものと考えたい。つまり、婢女を「金銭で売買され、主人の意のままに虐待される奴隷」とのみ考えることはできず、むしろここに婢女問題の難しさがある。

もう一点は、某家の主婦が「罪を恐れて」いるとされていることである。これは、婢女への虐待がけっして社会的に認知されたものでなかったことを、物語っている。1923年9月、大東門街で若い女性が自殺未遂事件を起こした。その原因は姑による虐待であると見られ、両者ともに公安局に送られることになったが、調査によればこの姑は以前、おさない婢女を虐待して「官庁の懲戒」を受けたことがあったという⁽²³⁾。

本節の最後に、虐待による家出が、さらに誘拐に結びつく事例を紹介する。

15歳のある婢女は、女主人の虐待に耐えかね、姉をたよって逃げ出した。ところが姉の住所がよくわからず、路上をうろうろしていたところ、ある学校の雑役夫が校内に誘いこんで数日泊めてやったのち、「母親を探してやろう」といつわって香港へ連れ出そうとした。さいわい学校の正門を出たところで偶然、婢女が数日前に道を尋ねたまさにその巡査に出会った。こうして事件は未遂に終わった⁽²⁴⁾。

またある婢女は虐待から逃げて友人の所に身をよせたところ、そこに同居していた婦人が「仕事を紹介してやる」というので、一緒にある店について行った。ところがその晩、婦人が店の女性と「身価」を相談しているのが聞こえた⁽²⁵⁾。

さらにある婦人は、7歳の婢女を連れて街に出たが、途中で見失ってしまった。これは単純な迷子だったようで、すぐに警察に保護されて決着したが、このとき婦人が心配したのは「誰かに誘拐されるのではないか」ということだった⁽²⁶⁾。

「誘拐」は婢女のすぐ近くに存在した。とりわけ、虐待から逃れようとした婢女が、つぎに誘拐、人身売買の標的になるということは、婢女のおかれた境遇を端的に物語っている。

そのほか『広州民国日報』には、失踪をともしなわない虐待そのものについての事例や、また、妾として売られそうになって逃げ出す事例などもあるが、婢女にかんする記事のおもな内容は、以上でおおむね紹介し終えたといっていよい。

2. 蓄婢反対運動と法制化

広東では婢女にかんする本格的な法令は1927年3月にはじめて施行され、さらに1929年にかけて整備されてゆくが、その前史といってもよいものが若干存在する。そこで本章では、辛亥革命前後から1920年代後半までを4つの時期に分けて整理してみたい。

a. 警察庁長・陳景華

すでに宣統元年（1909年）末、清朝が人身売買を永遠に禁止し、法律的にはこの段階で婢女問題は解決したはずだった。しかし、この法律は実効性をもたず、問題は民国時期に持ち越された。

近代広東において、政界の要人として最初に婢女に注意をむけたのは、おそらく陳景華だろう。1865年に香山県に生まれた陳は、1888年に挙人となり、広西省で知県をつとめたのち、香港やタイで革命活動に従事し、辛亥革命後、広東省の警察庁長に任命される。しかし翌1913年、第二革命が失敗した直後の9月15日に、袁世凱派の竜済光によって殺害される⁽²⁷⁾。このため、警察庁長の職にあったのはわずか2年にも満たなかったが、草創期の広東警察を軌道にのせるうえで、おおきな役割をはたした人物である。

陳景華は知県時代に犯罪者をたくさん殺したために「殺人王」と呼ばれ、警察庁長時代にもおおくの人を殺しているとされる⁽²⁸⁾。しかし一方で、あるとき、主人に打たれて怪我をした婢女が警察に連れてこられたのを見て「哀れに思い」、各善堂に女子教育院を設置するよう命じ、さらに、虐待されている婢女や妾、童養媳、尼姑、幼妓などを発見した場合はすべて女子教育院に収容するように通達を出したという。

また広東省の妹仔にかんする香港政庁の報告書によれば、妹仔の売買をめぐる、「民国元年（1912年）には、陳景華によって条例が非常に厳格に適用され、かれの在任期間に妹仔にかんして10件以上の問題がおこり、それらの妹仔は陳景華によって親元に返された」⁽²⁹⁾。

この「条例」がなにを指すのかは不明だが、陳景華が婢女問題に非常に配慮していたのは確かだろう。しかし、香港政庁の報告書はすぐつづけて、「その後、政治情勢が変化し、そして時がたつにつれて弛緩してゆき、条例は事実上、死文となってしまった」という。

b. 香港の蓄婢問題と広州

この10年後の1922年、そのころ広州にあった孫文の中華民国政府が、2月9日の国务会議で禁蓄婢案を通過させ、同月24日、施行を命じた⁽³⁰⁾。これは、大理院長の徐謙が提案したものだった。

1871年生まれ徐謙は、清朝時代にすでに京師高検庁長その他の法律畑を歩んできた人物だが、かれの説明によれば、民国元年3月に公布された『臨時約法』の第5条「中華民国人民は、等しく平等であり、種族、階級、宗教による差別があつてはならない」⁽³¹⁾は、婢女を含むものであり、とくにそのなかの「階級」云々の部分が、蓄婢を禁止するもっとも基本的な根拠になるという。そしてさらに、おなじく民国元年に、清朝の法律が一部を除いてひとまず民国に継承された際、その中には、人身売買を禁止する清末の条例が含まれ、そこに奴婢の禁止が明記されていることを指摘する。ただし、のちにこの条例は廃止され、人身売買については新刑律の誘拐罪が適用されることになるが、しかし「婢女」という言葉が消えたからといって、それへの禁止が消滅しているわけではないと説く⁽³²⁾。

この年には、北京の女子学生があらたに女子参政権運動を起し、その綱領のなかに「婢女の

売買を禁止する」という語句が盛り込まれた⁽³³⁾。だが、1922年のこの禁蓄婢令にかんしてむしろ注目されるのは、香港の動向である。

香港の妹仔をめぐるのは、1919年末から1920年初頭にかけてはげしい批判がおこっていたことはすでに紹介したが、その後、1921年には、香港で二つの妹仔制反対協会、すなわち防範虐婢会と反対蓄婢会が活動を始め、ロンドンでは奴隷制反対協会が妹仔制度の廃止を政府に要求した。そして1922年2月22日には、植民地省長官のウィンストン・チャーチルが香港総督に対して、委員会を設置し、妹仔制廃止の布告を出すよう、つよく要請した⁽³⁴⁾。

この時期、一足先に2月9日に徐謙が蓄婢禁止を提案し、24日に孫文がそれを発令し、3日後の27日には、香港の反対蓄婢会がこの日開かれた第23回設立準備会議で、孫文の禁令を英語に翻訳することを決議している⁽³⁵⁾。さらに3月26日には反対蓄婢会が正式に成立するが、この式典に代理を派遣して演説をおこなったのが、徐謙であった。さきに紹介した蓄婢をめぐる民国元年以来の法律の沿革は、この演説のなかで説明されたものである。しかも徐謙は、反対蓄婢会の会員であるという⁽³⁶⁾。

2月9日の徐謙の提案を伝える「省報」（なにを指すのか未確認）は、その背景の一つとして、蓄婢がイギリス議会で問題にされ、また香港でも反対蓄婢会が組織されていることを記す⁽³⁷⁾。広州と香港とはこの時期、婢女問題をめぐって密接につながりあっていただろう。

なお、中華民国政府のこの禁蓄婢令は、婢を置くことを禁止し、違反者は罰すると述べるのみで、実効性のある具体的な処置を定めるものではなかった⁽³⁸⁾。

c. 婦女解放運動

香港では、1922年2月22日のチャーチルの要請は、翌1923年の妹仔条例制定に結実する。これは全部で19条からなり、かなり具体的な規定を盛り込んでいる。残念ながら、この条例が広東でどのような反応を呼び起こしたのかについては、筆者は関係資料を持ちあわせていない。

一方、広東では、本格的な条例は1927年を待たねばならなかった。その間、婢女問題はおもに婦女解放運動のなかで取りあげられることになる。

1923年8月に南京で開かれた中国社会主義青年団第二次全国代表大会は、その青年婦女運動決議案のなかではやくも婢女に言及し、蓄婢禁止を訴えた⁽³⁹⁾。

広東の婦女解放運動も1924年から1927年にかけて盛り上がり、つぎのように蓄婢禁止が繰りかえし取り上げられる⁽⁴⁰⁾。

1924年

3月

国際婦人の日。標語の第8は「女子を売買して婢とする習慣を排除しよう」。

1925年

5月

海豊婦女解放協会組織大綱に「禁止蓄婢」。

広東婦女解放協会綱領に「禁止蓄婢」。

11月

国民党中央婦女部、広東各界婦女千余人による聯歓大会の決議案に「禁止立妾与蓄婢」。

12月

梅県婦女解放協会が「不蓄婢女」を提唱。

1926年

1月

中国国民党第二次全国代表大会、婦女運動決議案に「禁止買売人口」。

2月(?)

汕頭婦女運動委員会の決議に「禁止納妾蓄婢」。

ただし、これらがおおむね宣言だけに終わり、具体的な運動につながらなかったことは、1926年12月のつぎの記事からうかがえる。

現在、中国の女性は、その解放を提唱する声が、日ましに高まっている。たとえば女性の参政、婚姻の自由、教育の平等、経済の独立など、あらゆる不平等な扱いにたいして、力のかぎり戦っている。ところが悲惨にも人間性を奪われ、苦しみを嘗めつくしている婢妾問題にたいしては、まだどのような意見表明もなされていない……⁽⁴¹⁾。

各地の婦女解放協会は繰り返しかし婢女問題に言及しており、この問題がこれまでまったく無視されてきたというのは、厳密さを欠く。しかし、婦女運動の主張は、一般の人の耳にはほとんど届いておらず、ましてそれによって婢女の境遇が改善されるようなことはなかったのだろう。

なおこの引用は、ある女性法学家が「解放婢妾救済会」を結成したことを伝える記事からのものだが、この救済会そのものも新聞には続報が見られず、とくにおおきな成果は得られなかったようだ。

d. 奴婢解放弁法

広東および香港において、婢女の解放にかんしてはじめて具体的な提言をおこなったのは、香港の反対蓄婢会が1921年8月に第6次準備会議で表決した「宣言書」中の、「弁法四条の乙」だと思われる。これは厳密に言えば条例案ではなく、政府への請願事項としてまとめられたものだが、全6項からなり、その後の条例(案)の先駆形態をなす。

以下、1920年代に現れた条例および条例案を年代順にならべると、つぎのようになる。

①1921年8月 香港、反対蓄婢会「宣言書」⁽⁴²⁾

②1922年2月(?) 勞日富「釈婢具体弁法」⁽⁴³⁾

勞日富はホノルル在住の牧師で、広東省開平県出身の華僑。ホノルルの新聞で、香港に反対蓄婢会が設置されたことを知り、大いに共感したのだという。そしてこの「弁法」を付した婢女解放請願書を郷里の開平県議会に提出した。

③1923年2月 香港「妹仔条例」⁽⁴⁴⁾④1926年9月 勞日富「組織広東禁婢会之条陳」⁽⁴⁵⁾

このとき、勞日富はわざわざ休暇をとって帰国し、香港および広州で反蓄婢運動の関係者や国民政府の要人と会見し、この「条陳」を国民政府に提出した。会見した要人のなかには、政府の婦女部部長であった何香凝も含まれている。

⑤同年12月 仏山市民政局「解放婢女暂行条例」⁽⁴⁶⁾

仏山市の市政局長が提唱したものだという。

⑥1927年1月 広東省政府「解放奴婢弁法」草案⁽⁴⁷⁾

これは、名称にあるとおり、婢女だけでなく奴婢全般にかんする法律だが、全12条のうち、「奴」についての条文がわずか2条であるのにたいして、「婢」についてのものが7条を占め、実質上は婢女解放条例に近いものになっている。

これらの条例、条例案の内容を簡潔に整理したのが、つぎの表である。ただし、類似関係を見やすくするため、②と③は順序を入れかえてみた。

	① 反対蓄婢会宣言書	③ 妹仔条例	② 釈婢具体弁法	④ 組織広東禁婢会之条陳	⑤ 解放婢女暂行条例	⑥ 解放奴婢弁法
婢女の解放、禁止	○	○	○	○		○
契約書の回収、無効			○	○	○	○
親元への帰還		○	○	○		
登録	○	○	○	○	○	○
呼称の廃止、変更	○		○	○	○	○
売買、移転の禁止	○	○	○	○	○	○
虐待の禁止	○	○			○	○
収容施設	○					○
適切な待遇		○			○	○
教育を受けさせる					○	○
妾にすることの禁止			○	○	○	○
結婚への配慮			○	○	○	○
契約雇用、召使い	○	○		○		
養女を置く条件			○			
政府による委員会等	○			○		
罰則		○	○	○	○	○

この表でみるかぎり、婢女解放関係の条例、条例案は、香港のもの(①、③)、勞日富のもの

(②、④)、広東のもの(⑤、⑥)の3種類に大別できるだろう。

1927年1月20日の『華僑報』は、労日富の提案が国民政府に取り入れられた結果、「解放奴婢弁法」が作成されたとする⁽⁴⁸⁾。ところが広東省政府の草案は、このようにむしろ仏山市のものによく似ており、すくなくとも内容に関しては、直接的には仏山市の条例を参考にしているようである。

いずれにしても、広東のもの(⑤、⑥)は、香港(①、③)と労日富(②、④)を集大成した形になっている。

ただし、重要な異同が三点ある。広東の条例には、親元への帰還および、雇用契約についての言及がないこと。そして、広東独自のものとして、教育を受けさせる義務が取り入れられていることである。雇用契約についての項目とは、婢女制度の抜け道をふさぐための、たとえば、「10歳以下の女兒を召使いとすることの禁止」(香港妹仔条例第5条)といったことである。

これらの異同がなぜ生じているのかについては、資料がないために不明である。

なお、広東省政府「解放奴婢弁法」草案は、ほとんど修訂されることなく施行された。

3. 都市の近代化と風俗改革

香港が妹仔条例を制定した背景にはイギリス本国からの強い要請があり、その要請の根幹には、自国植民地内で奴隷制度は認めない、という考え方があった。

そして、1921年から22年にかけての広州と香港は、婢女問題において一定のつながりをもっていた。

これにたいして、1926年末から27年初頭にかけて現れてきた仏山市と広東省の提案は、その前に労日富の働きかけがあったとはいえ、いかにも唐突である。それらの条例にたいする提案説明部分は、人道主義的な言葉を抽象的に繰り返しているのみで、提案にいたった具体的な経緯についてはなにも述べていない。

一方、香港では、妹仔条例以降、1924、25、26年と、とくに目立った妹仔反対運動はなく、香港の影響をうけたとも考えがたい。逆に、1927年3月に広東省が「解放奴婢弁法」を施行して取り締まりを強化したことをきっかけとして、香港でもう一度反対運動が強まるのである⁽⁴⁹⁾。

仏山市と広東省の条例は、なにを背景として提起されてきたのだろうか。

ここですこし視点を変えて、当時の広州社会に目をむけてみたい。

香港政庁は1929年に広東省の条例の施行状況を調査しているが、その報告書のなかに、つぎのような部分がある。

先年の、少女が胸を締め付けることにたいするいわゆる禁令と、中医と占い師にたいする今年の規制は、すべて、それらの背景と、〔中医と占い師への〕その規制が失業に結びつくという事実をきちんと考慮することなく、試みられている。したがって、そのようなやり方は失敗に終わるしかないだろうと思われる⁽⁵⁰⁾。

これは、広東省では問題の社会的背景を十分に考慮せずに施策がなされることがあり、婢女の場合も同様だ、と言おうとしているのだが、この点はのちほどもう一度取りあげることにして、ここでむしろ注意したいのは、1920年代の広東（とくに広州）では、こうしたいわば急ぎすぎているようにも見える政策が、とくに広州の都市行政に関連して、他にもつぎつぎと打ち出されていることである。

ここで、広州市政府の歴史を振り返ってみると、辛亥革命ののち、1918年にいってはいじめて市政公所が設置され、総務、工程、経界、登録の4科が置かれた⁵¹⁾。しかしその仕事は、ほとんど広州城壁の撤去や道路建設などに限られていたという⁵²⁾。

1921年2月15日、広州市暫行条例によって広州市政庁が正式に成立し、行政事務を担当する部局として、財政、工務、公安、衛生、公用、教育の6局が設置された⁵³⁾。広州の近代的な都市行政はここから始まる应该说よい。

こののち市政府（またときには省政府）は、さまざまな社会团体や社会事象を市（省）の管理下に移しつつ、その近代化を試みた。たとえば公安関係では民団、商団等の民間自衛団体を政府の統率下に置こうとした⁵⁴⁾。また衛生関係では、医者の登録を義務付け⁵⁵⁾、教育関係では私塾を取り締まり、劣等とみなしたものは解散させた⁵⁶⁾。

こうした動きをもっともよく象徴しているのが、善堂の管理問題だろう。1925年10月、省政府は、広州の主要な善堂9つを市政府の管理下におくことを命じた⁵⁷⁾。それは、善堂の財産が一部の人間に牛耳られていることを理由とするものだったが、この管理問題を報道した新聞記事は、善堂の管理者の考え方が古く、「近代の都市生活では、この種の一面的な慈善機関は不必要なのではないか」とさえ言い切った⁵⁸⁾。

実際に当時、善堂やその他の民間団体がそれまで果たしてきた役割のなかに、政府の行政が次第に割りこみつた。その様子を『広州民国日報』から拾い上げてみると、治安維持や消防、病院建設等のみならず、つぎのような事象にまで及ぶ（かっこ内は記事の日付）。

「市庁設法安置瞽姫」 (1926年1月13日)

「教育局接收貧民教養院」 (1926年5月22日)

「收容市内乞丐弁法」 (1927年7月18日)

「貧教院擬收容盲人瞽姫」 (1928年4月12日)

「衛生局籌設癲瘋救済会」 (1928年6月21日)

このほか、済良所についてはさきに紹介したが、公安局にはさらに、身寄りのない老人を收容するための「留養院」も付設されていた⁵⁹⁾。

瞽姫、貧民、乞食、盲人、ハンセン病患者、老人。このように並べてみれば、ここに婢女が加わっても、けっして不自然ではないだろう。

つまり1927年の広東省の奴婢解放令の、とくに婢女にかんする部分は、婦女解放運動がくりかえし訴えたような女性の解放の一環として提出されたというより、市政府と省政府がつぎつぎと

打ち出していた都市行政政策の一部であった可能性が高い。

なお筆者はここで、省政府と市政府とを厳密には区別していないが、それは、もともと婢女がすぐれて都市的なものであり、婢女にたいする法令は、直接には都市住民を対象としたものだと考えられるためである。

やがて1929年にいたると、9月にあらたに設置された社会局が、広州市のこうした社会福祉面を担当することになる。社会局は、前年末から本格化していた「風俗改革」運動や、またこの年に起こっていた迷信反対運動⁽⁶⁰⁾をさらに推し進め、すでに10月の時点で、矢継ぎ早につぎのような規定を打ち出していく（カッコ内は記事の日付）。

「社会局規定市民結婚儀式」 (10月15日)

「社会局令嚴禁市民束胸纏足穿耳」 (10月16日)

「社会局規定喪礼儀式」 (10月17日)

ここで「束胸」というのが、香港政庁の文書に見えていた「少女が胸を締め付けることにたいするいわゆる禁令」と同じものであるが、これは1927年からすでに問題視され、1928年には国民政府内政部が禁止の通達を出している⁽⁶¹⁾。

そして1929年11月には、この社会局があたらしい「広州市禁止蓄婢弁法草案」を起草し、市政府に提案する⁽⁶²⁾。ここでも、婚礼や葬礼、また束胸纏足穿耳といったものと並んでこの草案が出てきていることに、注意すべきだろう。

「風俗改革」をキーワードとして、あらためて1927年の解放奴婢弁法を見直してみると、この弁法は省政府民政庁が提起したものだが、その提案理由のなかに、「本庁は職掌として民政をつかさどり、風俗を改良する責任がある。そこで解放奴婢条例を起草し」云々、という言葉が見える⁽⁶³⁾。つまり婢女問題が「風俗改革」の枠内でとらえられているのである。

おわりに

1920年代の広東省において、婢女の解放問題は、おそらく香港の影響を受け、また香港に影響をあたえながら、まず1922年におおきく取り上げられた。これは、奴隷状態にある人間を解放する、という目的をもつものだった。

その後、より具体的な立法措置として、1927年に解放奴婢弁法が施行されるが、この場合は、女性解放というよりは、風俗改革の一環として行われたと思われる。

そして、香港でも妹仔条例後に問題が解決したわけではなかったが、広東省でも、社会局が1929年にかさねて蓄婢禁止の法律を提案したことは、1927年の「解放奴婢弁法」がじゅうぶんには機能していなかったことを示している。

ただし、法律を実行する努力はなされていた。1927年3月1日の弁法施行後、民政庁は広州市内に特派員を派遣して戸別に宣伝を行わせ⁽⁶⁴⁾、3月中旬までに警察に自主的に提出された婢女の契約文書が、数百件あったという⁽⁶⁵⁾。また婢女の人数調査が行われ、広州市第一区で婢女を置いている家は200余戸あったのにたいして、そのうち100余名の婢女がすでに登録していた⁽⁶⁶⁾。そし

て、7月下旬までには、広州全市ですでに解放された婢女は計919名に上っているという⁶⁷⁾。

このように進められていった婢女の解放が、なぜうまくいかなかったのか。この点を具体的に検討できるような資料はないが、失敗の原因はある程度推測できる。一番の問題点は、香港政府の文書がはやくから指摘しているように、婢女制度の背後に「貧困」というものがあることだろう。

1927年7月下旬までに919人の婢女が「解放」されたのはよいとしても、かれらはそのあと、いったいどこへ行くのか。もしその両親が日々の食事にも困って娘を売ったのだとすれば、そのような親元へ戻ることはできない。もっとも無難な方法の一つは、引き続き元の主人のもとで、有給の召使いとして雇われることだが、その場合に婢女制度が再現しないことを保障するはずの、雇用契約にかんする規定が、広東省の法律には抜け落ちている（たとえば「組織広東禁婢会之条陳」第6条の丙は、「毎月の給与は3元以上」）。婢女存在を、やや皮相な「風俗改革」の問題としてとらえていたことの、ひとつの現れだろう。1929年の社会局の提案は、罰則が詳しくなっているのみで、やはり雇用にかんする規定はない。

こののち、南京国民政府行政院が、つぎのような条例の公布を命ずる。

1932年9月「禁止蓄奴養婢弁法」⁶⁸⁾

1936年1月「禁止蓄婢弁法」⁶⁹⁾

婢女問題は、それなりに行政側から注目されながらも、民国時期にはついに根本的な解決にはいたらなかったようである。

注

- (1) 朱其華著、藤井正夫訳『一九二七年の回想－北伐戦争従軍記－』（1991年）第2～3頁。
- (2) 伊藤武雄『黄竜と東風』（国際日本協会、1964年）第102頁。
- (3) 佐々木到一『ある軍人の自伝』（普通社、1963年）第108頁。
- (4) 可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』第3章「妹仔制度と『猪花』」（岩波書店、1979年）。
- (5) 同上、第293頁。
- (6) “Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 16th May, 1929.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION, Presented by the Secretary of State for the Colonies to Parliament by Command of His Majesty, November, 1929.* p.62（一橋大学経済研究所蔵）。
- (7) 「香港婢女数日之調査」『反对蓄婢史略』（1933年跋）第151頁。
- (8) 「失人類誌」1923年11月10日。
- (9) 「奸拐察警」1923年10月3日。
- (10) 「秘書失婢」1925年7月22日。
- (11) 「私逃何多」1923年9月11日。
- (12) 「小婢鉅竊私逃」1929年4月2日。
- (13) 「婢放白鴿」1925年7月4日。

- (14) 「起拐両誌」1923年9月17日。
- (15) 「少主迷姦婢女」1925年9月15日。
- (16) 「買売婢女之轆轤」1925年4月1日。
- (17) (雑件) 1926年5月27日。
- (18) 「被虐婢警署訴苦」1925年5月12日。
- (19) 「苛虐婢女不敢領回」1925年5月13日。
- (20) 李宗黄『新広東觀察記』(商務印書館、1922年) 第28頁。
- (21) “Extracts from Report of Proceedings in Hong Kong Legislative Council, 28th December, 1922.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.30,31.
- (22) “Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 6th March, 1923.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.19,20.
- (23) 「姑婦道苦」1923年9月10日。
- (24) 「可憐婢幾被誘拐」1925年4月1日。
- (25) 「逃婢又被拐売」1928年5月22日。
- (26) 「失婢幸獲得回」1925年12月25日。
- (27) 以下、陳景華については、『広東近現代人物詞典』(広東科技出版社、1992年) 第304頁、陳哲三「陳景華对中国革命的貢獻」(『広東文献』第8巻第2期、1978年)、杜如明「広東警察庁長陳景華」(『広東文献』第2巻第1期、1972年) にもとづく。
- (28) 朱子勉「辛亥革命後広東政局の演變」『広東辛亥革命史料』(広東人民出版社、1981年) 第425頁。
- (29) “Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 16th May, 1929. Enclosure 3.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.74.
- (30) 広州市文史研究館稿『広州百年大事記(上)』(1984年) 第246頁。
- (31) 『中華民国史檔案史料匯編』第一、二輯(江蘇古籍出版社、1991年) 第106頁。
- (32) 前掲『反对蓄婢史略』第68～69頁。
- (33) 陳東原『中国婦女生活史』(上海文芸出版社、1990年影印)(1928年初版) 第420頁。
- (34) “Telegram from the Secretary of State for the Colonies to the Governor of Hong Kong, 22nd February, 1922.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.3.
- (35) 前掲『反对蓄婢史略』第46頁。
- (36) 同上、第67～68頁。
- (37) 同上、第84頁。
- (38) 原文は『反对蓄婢史略』第85～86頁に収録されている。
- (39) 『広東婦女運動史料(1924-1927年)』(1983年) 第79～80頁。
- (40) 「広州婦女団之活動」『広州民国日報』1924年3月5日および同上『広東婦女運動史料』による。
- (41) 「解放婢妾之先声」1926年12月15日。
- (42) 前掲『反对蓄婢史略』第52頁。
- (43) 同上、第86、180頁。

- (44) “Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 6th May, 1923, Enclosure 1.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.20-22.
- (45) 前掲『反对蓄婢史略』第86、180、291頁。「組織広東禁婢会之条陳」『広州民国日報』1926年9月23日。
- (46) 前掲『反对蓄婢史略』第177～178頁。
- (47) 「省政府解放奴婢之提議案」1927年1月7日。
- (48) 前掲『反对蓄婢史略』第180頁。
- (49) 前掲、可見弘明『近代中国の苦力と「猪花」』第324頁。“Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 22nd February, 1929.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.47.
- (50) “Despatch from the Governor of Hong Kong to the Secretary of State for the Colonies, 16th May, 1929, Enclosure 3.” *HONG KONG Papers relative to the MUI-TSAI QUESTION*. p.74.
- (51) 『広州指南』（1932年？）第17頁。
- (52) 前掲、李宗黄『新広東觀察記』第2頁。
- (53) 「広州市暂行条例」、李宗黄『新広東觀察記』第2～6頁所収。
- (54) 蒲豊彦「1920年代広東の民団と農民自衛軍」（『京都橘女子大学研究紀要』第19号、1992年）に詳しい経緯をまとめた。
- (55) 「医生未領照不得執業」1924年8月2日。
- (56) 「教育局取締塾師布告」1923年8月3日、「飭令解散戊等私塾」1923年8月6日。
- (57) 「収管九大善堂之省政府令」1925年10月17日。
- (58) 「九大善堂収歸市政府」1925年10月16日。
- (59) 前掲、李宗黄『新広東觀察記』第28頁。
- (60) 迷信反对運動については、三谷孝「南京政權と『迷信打破運動』」（『歴史学研究』第455号、1978年）がある。
- (61) 「内政部嚴禁婦女束胸」1928年6月29日。
- (62) 「社会局呈請市府禁止蓄婢」1929年11月17日。
- (63) 「民政庁通告解放奴婢意義」1927年3月7日。
- (64) 「按戸宣伝解放奴婢意義」1927年3月4日。
- (65) 「広東全省解放奴婢之実行」1927年3月19日。
- (66) 「一区婢女実数之調査」1927年3月19日。
- (67) 「弁理全市解放奴婢情形之呈報」1927年7月23日。
- (68) 『中華民國史檔案史料匯編』第5輯第1編（文化1）第476～478頁。
- (69) 同上、第488～490頁。